

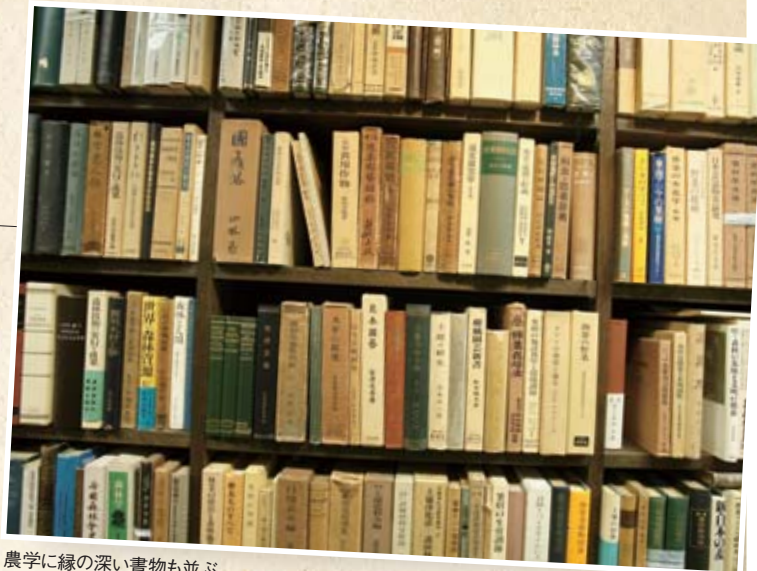
# 理学部御用達の古本屋

井上書店

**東** 大正門前。小雨のちらつく歩道に待つこと10分。午前10時を少し回ったところで店のシャッターが上がる。招き入れてくれたのは井上雅昭さん。店主、井上昭直さんのご子息だ。昭直さんは奥で黙々と手を動かす。昔ながらの本の目利きで、取材や撮影は受けないとのこと。その気骨が清々しい。

井上書店は明治から続く古本屋だ。商いを始めたのは明治10年代。「記録を見ると、最初は湯島、その後、菊坂に移り、大正になってここに移ったようです」。父親である昭直さんの著した「井上書店の記—井上喜多郎小伝—」のページをめくりながら、雅昭さんは話す。菊坂というのは本郷三丁目辺りの地名で、そこに菊坂ホテルという文学者の溜まり場があった。井上喜多郎氏は雅昭さんの祖祖父にあたる。

書棚を埋め、棚に詰め上げられた書物からかすかな古書の香りが漂う。売れ筋本を並べる書店にはない知識の香りだ。



農学に縁の深い書物も並ぶ。

雅昭さんによれば、井上書店が扱うのは主に自然科学系の書物。植物分類学で足跡を残した東京大学理学部の原寛教授もこの店の最頂だったという。だが、時代が変わり、いまは研究者もネットで本を探す。「だからネットにない本を集めています」と雅昭さんの表情が一瞬固くなる。

毎週、神田神保町で開かれる本の市は雅昭さんにとって戦いの場だ。ここでどんな本を仕入れられるかが商売を決める。父の昭直さんはかなりの目利きだが「昔気質の人なので、あれこれ教えてはくれない」。となれば自分で経験から学ぶしかない。

「とにかくお客さんが喜んで買ってくれるような本を集めたい」と雅昭さんは話す。しかし、顧客は自然科学の手練れたち。その要望についていくのは並大抵のことではない。「代々続いてきた店を守るため、もう、毎日が勉強です」。そう言う雅昭さんの声に力がこもった。



井上書店の次代店主、井上雅昭さん。



店主昭直さんの著した井上書店の小史。